

第 15 回 ODA 評価ワークショップの開催 (概要と評価)

平成 30 年 2 月

2 月 7 日から 8 日にかけて、外務省はスリランカのコロンボにおいて、スリランカ国家政策経済省との共催で「第 15 回 ODA 評価ワークショップ」を開催した。本ワークショップ概要及び評価は以下のとおり。

1 概要

(1) 本ワークショップは、参加各国における ODA 評価に関する理解の促進や能力強化を目的に、2001 年以降ほぼ毎年開催してきている。

今次ワークショップは、日本、スリランカを含むアジア大洋州諸国（15 か国）、及び国際機関等の参加を得て、共催国である日本（増島稔 外務省国際協力局審議官）及びスリランカ（ルワンチャンドラ スリランカ国家政策経済省次官）の開会式代表挨拶で幕を開け、2 日間で 4 つのセッションを実施し、最後に共同議長（湊直信 国際大学客員教授、及びプリヤンガ・ドゥヌシンヘ コロンボ大学上級講師）により共同議長サマリーがとりまとめられ、終了した。



参加国：インド、インドネシア、スリランカ（共催国）、タイ、ネパール、パキスタン、バングラデシュ、フィリピン、ブータン、マレーシア、ミャンマー、モルディブ、モンゴル、日本（共催国）、米国（USAID）

参加機関等：国連開発計画（UNDP）、アジア開発銀行（ADB）、コロンボ大学、国際大学、広島大学、スリランカ評価協会

(2) 各セッションの概要

(ア) 第 1 セッション（「ODA 評価の役割と国際的潮流」）

本セッションでは、2015 年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」の時代における評価のあり方について議論がなされた。発表者（国連開発計画（UNDP）、アジア開発銀行（ADB））から、「持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」にて記載された国際目標である持続可能な開発目標（SDGs）は指標の数やその複雑さから評価への挑戦であると同時に評価の好機と捉えられるという点、SDGs はより良い「学習」への需要を高め、国際評価コミュニティが評価の付加価値を高める

契機となる点が示された。続く発表者（スリランカ）からは、評価における学習と説明責任のバランスをテーマに発表がなされ、機能重視の評価、参加型評価の重要性についての指摘がなされた。日本のコメンテーター（JICA）からは、評価の重要性が高まっており、ドナーと開発途上国間の協働の重要性が確認された。

（イ） 第2セッション（「SDGs への対応と取組－インドネシアにおける取組とその課題－」）

本セッションでは、インドネシアにおける SDGs のモニタリング・フォローアップへの取組事例を通じて議論が行われた。日本の発表者（広島大学）から、JICA が同国で実施中の「持続可能な開発目標（SDGs）の計画・運営推進に係る情報収集・確認調査」からの発見・気づきの点が紹介され、コメンテーター（インドネシア）より、インドネシア政府が SDGs のモニタリング・フォローアップにおいて「誰一人取り残さない」という点を注視している点が強調された。コメンテーター（スリランカ評価協会）からは、インドネシアが他国より SDGs モニタリング・フォローアップにおいて一歩先んじているという所感が示された。

（ウ） 第3セッション（「各国における SDGs への対応と取組」）

日本のコメンテーター（外務省 ODA 評価室）より、ワークショップに先立ち参加者に配布された質問票の回答に基づき、アジア大洋州諸国における SDGs への対応と取組の傾向が示された。続いて日本を含むアジア大洋州 10 か国の参加者より、より詳細な各国の取組と課題が共有され、複数の参加者より SDGs のモニタリング・フォローアップをすすめて行くにあたり、SDGs 指標のデータの管理が課題であるとの意見が表明された。

（エ） 第4セッション（「ODA 評価の多様性：プログラム/プロジェクトレベルの評価の取組」）

日本の発表者（JICA）から、インドにおけるデリメトロ・プロジェクトのプロセス評価についての事例が紹介され、プロセス評価が通常の事後評価からの学びを補完する点が強調された。続いて日本の発表者（外務省 ODA 評価室）から、同省で実施している ODA 第三者評価における外交の視点からの評価の取組事例について発表がなされた。コメンテーター（ネパール）よりは、定量的分析及び因果関係分析の重要性について指摘がなされた。

2 評価

- （１） 今回のワークショップには 15 か国から 42 名の参加者があり、アジア大洋州諸国からの幅広い参加が得られた。国際機関からは、国連開発計画（UNDP）、及びアジア開発銀行（ADB）が発表者として登壇した。また、日本からは外務省、JICA に加え、国際大学及び広島大学から有識者が参加し、スリランカ評価協会からコメンテーターの参加が得られ、多角的な視点からのインプットがなされた。
- （２） さらに、本ワークショップでは、インドネシアでの JICA の技術協力を通じた SDGs への対応と取組の発表に続き、アジア諸国 10 か国の参加者が、各国における SDGs

への対応と取組を発表する機会を設け、各国の多様な事例の紹介を通じて、相互学習を促進した。その結果、参加者間で自国における評価能力向上、制度整備についての意見交換が活発に行われ、その意欲が確認された。

- (3) こうした結果、SDGs の時代において、ODA 評価に関する手法や課題についての理解を促進し、評価能力の向上を目指すという本ワークショップの目的は達成されたものと考えられる。
- (4) さらに、本年のワークショップは、スリランカ国家政策経済省と共催で行ったことにより、スリランカ側から次官 3 名を含む多くの参加が得られ、また UNDP, USAID 等在スリランカの現地ドナー、評価を専門とするコンサルタントの参加があり、参加者にとってより広い視野から SDGs 達成に向けた評価の役割を学ぶ機会となった。また同時に日本の評価の取組をアジアから世界に向けて発信することが出来た。

(了)